

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追求、特集号
第五十号

遺族—— 大野トメ子さんの その後

無惨な遺体

あの日、どこへ飛んでいったのか、大野トメ子さんの夫・英之進さんの消息はつかぬままだった。
三川鉦で大爆発が起きてから、早や一昼夜以上。翌十日の夜半ともなれば、さすがに、遺体安置所に早変わりした三井鉦山の体育館のなかに、残された柩はわずかに四つ。いたずらに、香の煙ばかりがたちこめていた。



歲月のもつ意味の重さ

十二年間片田舎からアソニットへ通勤

牛の使い方も覚えた暮らし

たずねていった夜、意外に家のなかには明るかった。力君やミチ子さんも出てきて、何でも話す屈託のなさ。

運命が待ち構えていることなど露知らぬまま、朝家を出たとき。もう、英之進さんが生きて再び妻のトメ子さんのもとへ帰ってくることはなさそうだった。五体満足な姿の遺体であつてきてくれないものか、どんなにそれを待ちのぞんだことだろう。
体育館のなかに、たつた四つだけ残った柩のなかを何度か見て、英之進さんだと思われ、遺体はなかった。
それらの遺体というのが、片一方の脚ばかりだったり、さんざんいためつけられた頭の部分だけだったり、バラバラにちぎれ飛んだ肉片をともかくかき集めたものだったり、五体満足なものはいくつもあった。それも、何のたのめなのか顔も体もまるで酒樽でも見るように腫れあがっていて、とうとう、だれと見境のつく遺体ではなかった。英之進さんごとの遺体の顔、手の爪、口腔の内部(入れ歯)などを詳細に調べた結果、相模がまるつきり変わってしまうほど腫れあがっていたその遺体こそが、まさかにもう変わってしまった。

をつくってスライと並び、災害が英之進さんとわかつたのだった。どんなにすさまじいものだったかを、英之進さんと物語っていた。
それも、確認できたのは、なんとも十一日の朝で、忘れもしない、英之進さんが三十八、トメ子さんが三十二。結婚後、ちょうど十年の出来ごとだった。

常一着仕繕工として働いていた英之進さんは、その日何時もたないうちに、自分の命を二晩のうちに呑みこんでしまう恐ろしい玉名郡竹田町大字上八百七十九番

地。後には、村の氏神の八幡宮。早や、夢のあの日から十二年以上たつた。
八つで小学二年生だったひとり息子、トメ子さんは、すでに高校を終え、某企業で働く労働者。六つで幼稚園に通っていたひとりの娘のトメ子さんは、今高校。明るく育つた二人のわが子の姿を見るにつけ、よくここまで成長してくれたと、とくに英之進さんごとの遺体を見え胸に湧くトメ子さん。

そのトメ子さんの方は、三池労働組合の要求にもつき、遺族の生活対策の一つとして誘致された企業——荒尾市妙見にあるアソニット工場へ通勤。国鉄鹿児島本線の大野下駅から三つめの荒尾駅まで、同企業のスタートと同時に十年間通いつづけてきた。

突然に降りかかってきた不幸にうかつて生きてゆくには、まだまだ幼かった子とともたさかかまはなかつた。数年間、数年前まではおれなかつた。数年前までは存命していた、亡夫の奥のツノルさんのおかげで、初めの間こそ助かったものの、ツノルさんが他界したあとは、二人の兄妹はほとんど放ったらかされながら、その日その日をすごしていった。

力君とミチ子さんが朝目を覚ますころは、家のなかにはもう、母親の姿は影も形もなかった。
学校から帰れば、あそこはそれがつかり習慣となつてしまつたが、何となくテレビのスイッチをひねって、その前にある寝ながら、遅くならぬ母親の顔を待つばかりだった。
こんな暮らしがよほどたえた

結して、工場正門前に座りこんでた。たつた結果、通勤費が金額会社員となり、いくらか賃金が改善されたものの、これだ。
このアソニットに通うため、トメ子さんは毎朝五時起床。朝五時といえ、冬ならまだ真暗だが飯をたぐと一人でいそがきこみ子とともたに声をかけてから家を出る。
駅までかけつけ、午前六時五十分の上り電車へ。今は家から大野下駅まで自転車でも五分の道程も一年ほど前までは毎日徒歩でかけたものだった。
午前七時三十分荒尾駅着。アソニット工場方面のバスが、同七時四十分着。その間の三十分を、冬など吹きさらしの駅の待合室で待つのは寒くてつらい。
工場に着くのが、午前八時。あと五分から作業開始。
帰りは、仕事の終わりが午後五時。たいてい、一時間の残業。あたふたとバスで荒尾駅へ。午後六時二十九分発の電車に乗る。大野下駅着は、同六時四十五分。
それから自宅まで。帰宅はほとんど毎夜の七時過ぎ。
飯は、朝の七時のシャワーで保温しておき、おかずは帰ってからこしらえねばならぬ。でも、工場帰りに買つて帰る即席のものに合わせることも多い。だから、トメ子さんは「自分は料理はさっぱりです」と、娘のつづいたものはおいしく、という。ミチ子さんがこころをなやませるのと、まんざらうそではなさそう。

トメ子さんは、それでも仕事から解放されてはいない。明日一校でもよいに編んで、いくらでも収入をふやそうと、工場から持ち帰った仕事があるから。その日編みあげた身ぐるみ袖のつぎめつぎめにあててある綿糸をとりはすさなければならず、寝床にはいれるのはたいに夜も零時をまわってからだ。
「自分の生活にはレジャーどころか、テレビを見る余裕もないとですよ。私にとつて家とは、ただ寝るだけの場所です。さうね」とは悲しい言葉である。

覚える怒り
そんなトメ子さんを、さらに田舎の仕事を待っている。
作は稲。苗代と田植えこそ人手に頼っているものの、いざ稲が育ちはじめるときはきりきり舞いだ。消毒は、力君と二人で。施肥は自分一人で日曜日に。
反当たり九俵から十俵の米はとれる。肥料代、手間賃など差しひいていたら、米つくりが得か損かわからないが、「でも、わが家でつくつたものが何となくおもしろいから」。

いまの時代は耕作はすべて機械力だが、以前には牛使いかからほえなければならなかつた。
「過去十三年近く、いったい自分の時間があつたか、とくに首をかしげなくてはならぬ」あるとが。
それに、若い未亡人の身。心臓がとまるほどこわいめにもあつた。
工場へ通勤するの、家から駅まで歩いて通つたこと。夜ふけ、残業しての帰り道途中こんもりと茂った森の間の道を通り抜け、自宅近くまでたどりついたときだった。
後ろから歩いてきていただれともわからない男に、いきなり背なかからだすくめられてしまつた。

「アッ」という間もないできでたが、ここで負けてなるものかと自分で自分をしかりつけ、思いきつて大声をあげた。
「タスケテ。だれかきてエ」
間一髪、家を飛びだしてくる力君の足音をききつけ、男はサッと逃げた。これからは相変らず原稿をお寄せ下さるよう、心からお願ひいたします。 編集部

井のためだ」と、くやしさと怒りで体がうごめいたことを忘れることができない。
歲月の重さ
父親・英之進さんへの思い出。それはミチ子さんにはない。が、力君にはかきながら記憶がある。
無類のパンコ狂だったらしく、日曜の日になると、英之進さんは必ず二人の子とともをつれながら、汽車で荒尾市の某パンコ店に通つたものだった。パンコをやりたくなるときは、近くの小川へ魚釣りに……。そのためか、父に近かれたあとは、力君はひとりで魚釣りにでかけた。
トメ子さんには、夫・英之進さんについての記憶はいつまでもあつた。その胸のなかで、いまも英之進さんがありありと生きている証である。
たずねた後、大野家の仏壇の上で、英之進さんの遺影がニコリと笑つていた。この命を、三井は奪つたのだ。
あれからやがて十三年。トメ子さんにとつて、その十三年間という歲月のもつ意味の、何という重さ。

おわび
組合員・家族、それにCO患者やその家族に遺族、全国のCO遺族を守る会員の皆さん。
皆さんからいらる原稿を本紙に寄せていただくことを、心から感謝いたします。
ただ紙面のついでから、ときには大切な部分さえカットしなければならぬときがふくあります。そのたびに整理する者として心を痛めているのです。
でも何にでも限りがあり、真にやむを得ずカットしなければならぬ場合、その点どうかお許しください。これからも相変らず原稿をお寄せ下さるよう、心からお願ひいたします。 編集部